

『とりかへばや物語』の「異性装」

——女主人公のジェンダーコードの分析を中心として——

庄 婕 淳

はじめに

『とりかへばや物語』において「異性装」はいかなる意味を持つのであろうか。先行研究において、きょうだいたちのそれぞれのジェンダーは「男性的」「女性的」と自明的なもののように捉えられている。例えば、ジェンダーの視点から検討する先行研究に、菊池仁「『とりかへばや物語』試論―異装・視線・演技」（『日本文芸思潮論』一九九一年 桜楓社）、神田龍身「分身、交換の論理―『木幡の時雨』『とりかへばや』」（『物語文学』その解体・『源氏物語』「宇治十帖」以降）一九九二年 有精堂、安田真一「『とりかへばや』の交換可能の論理：ジェンダー論の視座から」（『日本文学』四六一―二 一九九七年二月）などがある。何れもきょうだいを一対のものとして扱い、その交換可能の論理を中心に論じるものである。小論はそれらと方向性を変え、ジュディス・バトラーのジェンダー理論を摂取し、ジェンダーが社会によって構築された一種のパフォーマンスであるとする認識のもと、「男性的」「女性的」と自明視されている観念からの脱出を目的とする。当時の歴史的文脈に基づき、テキストに集約されているジェンダーコードの表出を読み直すことで、文学史の視点から、『とりかへばや物語』を中心として、当時の文学におけるジェンダーに関する言説の構築を説明する。^①

その端緒として、きょうだいの「異性装」の出発点ともいえる父左大

臣の視点に即して描かれた作品冒頭部分に注目したい。その上で女主人公のジェンダー構成に関わる要素を整理する。女主人公の「異性装」のジェンダーを構成する要素は、「走る」という身体動作と彼女の才学にあると考えられる。したがって、最初に女主人公の「走る」身体動作の意味について文学史的な考察を行う。そして次に、女主人公が父左大臣主催の詩文の会に加わることや、琴笛の才に優れ、漢詩・和歌も堪能とされる、その才学の描写に注目していく。以上の考察を踏まえ、女主人公の人物造形の文学史的位置づけについて探究する。

一、「走る」女主人公

まず、物語冒頭の該当部分を掲げる。

【引用一】『とりかへばや物語』

いづれもやうやう大人びたまふままに、若君はあさましうもの恥ぢをのみしたまひて、女房などにだに、すこし御前遠きには見えたまふこともなく、父殿をもうとく恥づかしくのみ思ひて、やうやう御文習はし、さるべきことどもなど教へきこえたまへど、思しもかけず、ただいと恥づかしのみ思ひて、御帳のうちにのみ埋もれ入り

つつ、絵かき、雛遊び、貝覆ひ、殿はいとあさましきことに思しのためはせて常にさいなみたまへば、果て果ては涙をさへこぼして、あさましうつつまじとのみ思しつつ、ただ母上、御乳母、さらぬはむげに小さき童などにぞ見えたまふ。さらぬ女房などの、御前へも参れば、御几帳にまつはれて恥づかしいみじとのみ思したるを、いとめづらかなることに思し嘆くに、また姫君は、今よりいとさがなく、をさをさうちにもものしたまはず、外にのみつとおはして、若き男ども、童などと、鞠、小弓などをのみもて遊びたまふ。御出居にも、人々参りて文作り笛吹き歌うたひなどするにも、**走り出で**たまひて、もろともに、人も教へきこえぬ琴笛の音もいみじう吹きたて弾き鳴らしたまふ。ものうち誦じ歌うたひなどしたまふを、参りたまふ殿上人、上達部などはめでうつくしみきこえつつ、かたへは教へたてまつりて、この御腹のをば姫君ときこえしは僻言なりけりなどぞ、皆思ひあへる。殿の見あひたまへる折こそ取りとどめても隠したまへ、人々の参るには、殿の御装束などしたまふほど、まづ**走り出で**たまひてかく馴れ遊びたまへば、なかなかえ制しきこえたまはねば、ただ若君とのみ思ひてもて興じうつくしみきこえあへるを、さ思はせてのみものしたまふ。御心のうちにぞ、いとあさましく、かへすがへす、とりかへばやと思されける。

かく言ひ言ひても、幼きほどは今おなづかなど慰めつつさてもあり。やうやう十にも余りたまへどなほ同じさまなるを、こはいかがすべきと、世とともに嘆かしきよりほかのことなかりけり。さりとも年月過ぎば思い知ることとのみ待ちたまへるを、をさをさ直りたまふまじく見果てたまふに、なほいとめづらしう世に例なき御心地ぞしたまひける。

(一六七頁―一六八頁)

『とりかへばや物語』の「異性装」

この部分はきょうだいたちの性格とそれに伴う嗜好や行動様式を描いたものである。まとめれば、「若君」(男主人公)は、「もの恥ぢ」であり、漢文にあまり興味を示さず、「御帳のうちにのみ埋もれ入りつつ、絵かき、雛遊び、貝覆ひ」などの遊びに耽り、ごく親密な人以外には対面することもできない。逆に「姫君」(女主人公)は外にずっと居り、男の子たちと鞠、小弓の遊びをする。さらに、父左大臣が詩文管弦の会を催すときに、「**走り出で**たまひて、もろともに、人も教へきこえぬ琴笛の音もいみじう吹きたて弾き鳴らしたまふ。ものうち誦じ歌うたひなどしたまふ」とするのである。父左大臣に止められても、彼が着替えをする隙間を狙い、「まづ**走り出で**たまひてかく馴れ遊びたまへば」とするのである。きょうだいたちは別々に住んでいるので、来訪している客人たちもつい「この御腹のをば姫君ときこえしは僻言なりけりなどぞ」と誤解して、「ただ若君とのみ思ひてもて興じうつくしみきこえあへる」ようになってい

石埜敬子はこのきょうだいたちの行動様式が周りの誤解を招き、それが放置されたままで、姫君を若君、若君を姫君と周囲が呼称するに至った経緯について、「性を自覚する前の子供たちの行動は、本来の性格によるものであった。しかし、それが社会が作り出した性差規範、すなわち性別から期待される性質に外れる場合、どうなるか。人々は規範に基づいて理解認識し、父大納言は、人々の誤解を放置し、容認した。こうして二人の性を偽る生き方は、しだいに抜き差しならぬ現実となつてゆく」と指摘している^②。ここで、物語が構築している子供たちの行動様式を、「本来の性格によるものであった」と理解することについて、妥当か否かを証明することは不可能であり、その指摘には首肯できない。というのも、二人の行動、特に女主人公の行動は、周囲の「誤解」を招くもので、女主人公は若君と認識された上で、その素晴らしさを周囲から愛でられ

ているのである。つまり女主人公の行動が性別を判断するための根拠として機能しており、人々の誤解を招くだけでなく、実際、男性のジェンダーの理想的な行為として捉えられているのである。「性別から期待される性質に外れる」とだけ解されるには不足がある。それでは、女主人公の行動様式はどのような性質のものとして理解すべきなのであるか。

以下、まず女主人公に使われる二例の「走る」表現に注目する。

平安文学の「走る」表現については、稲田利徳と岩田行展などによる先行研究がある。ここでそれらを簡単に概観してみよう。

稲田利徳は「走る」表現の効果を、強烈な感情の表出と滑稽感を誘発させるものとそれぞれに分類した上で、王朝物語において、全体的に「人が走る」場面が少なく、大人、とりわけ身分の高い人や女性の「走る」姿を描写したケースは希有であると指摘している。その中でも希有な例である『源氏物語』における若紫の「走る」表現については、彼女の「幼さ」を強調するものと読解されている。そして『とりかへばや物語』の当該場面の「走る」は、『狭衣物語』の母代の「走る」と同じく、滑稽感を誘発させるものと解釈されている。^③

稲田利徳の論考と同じように、岩田行展は王朝物語における「走る」という身体表現を分析し、特に若紫の君と虫めづる姫君の「走る」場面とを関連づけて、この二つの場面に共通して見える「幼さ」に注目している。^④

また、若紫の「走る」場面について、原岡文子は、「紫の上は姫君をめぐる規範、秩序を一瞬逸脱し、男の子さながら「走る」姿を垣間見せた」と指摘している。^⑤

確かに、同時代の文学作品における「走る」の用例は少ない。特に幼児や従者を除き、主人公に限ってみると、上述した『源氏物語』の若紫、

『虫めづる姫君』の姫君、『とりかへばや物語』の女主人公の三人にだけこの表現が用いられている。先行研究を踏まえ、身分と年齢から見ると、この三人には、共通点があると考えられる。それは、成人式を行う前の、貴族の姫君ということである。他方、その相違点については、同じ「走る」という動作は共通するが、『源氏物語』の若紫、『虫めづる姫君』の姫君については、原岡文子と岩田行展によってジェンダーからの逸脱は指摘されているものの、実際、垣間見の対象とされ、「見る」側からすると、彼女たちの性別に対する誤認は存在しないことは重要である。つまり、明らかに男性ジェンダーの表出として描かれているのは、『とりかへばや物語』が初めてである。

その傍証として、『とりかへばや物語』の後に成立した同じく異性装を題材とする室町時代物語『新蔵人物語』がある。この物語において、男装したい三君が、「あこはただ、男となりてぞ走り歩きたき」と語る一節があることに注目すべきであろう。ここでは男になることと、身体の「走り歩く」ことが一体的に捉えられているのである。以上のことから、「走る」表現は『とりかへばや物語』によってジェンダーコードとして確立したと考えられることが、その影響を受けた『新蔵人物語』の存在によって理解できるのである。

二、「琴笛の音もいみじう吹きたて弾き鳴らしたまふ。

ものうち誦じ歌うたひなどしたまふ」女主人公

女主人公が「走る」目的とは何であろうか。それは父左大臣が主催する詩文管弦の会に参入し、音楽と漢学、和歌の才能を思う存分発揮することである。

先に挙げた引用一にも記されているように、女主人公と男主人公は、

幼い頃から、漢学に対する対照的な嗜好を示している。「もろともに、人も教へきこえぬ琴笛の音もいみじう吹きたて弾き鳴らしたまふ。ものうち誦じ歌うたひなどしたまふを」とあるように、女主人公は幼い頃より優れた漢学と音楽の才能を発揮している。それに対して、父左大臣から叱責されても、「やうやう御文習はし、さるべきことどもなど教へきこえたまへど、思しもかけず」とあるように、男主人公は漢文の学習に意欲を示さないのである。

このように二人のきょうだいが対比的に描かれていることについて、容易に想起させられるのは、『紫式部日記』にある、紫式部が自分の教育について回想する箇所である。

【引用二】『紫式部日記』

この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりし時、聞きならひつつ、かの人はおそう読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさどくはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう、男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」とぞ、つねに嘆かれはべりし。

それを、「をのこだに才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみはべるめるよ」と、やうやう人のいふも聞きとめて後、一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつに、あやましくはべり。

(二〇九頁)

きょうだいそれぞれの漢文に対する適性の差は、父の嘆きを引き起こす結果となる。「御心のうちにぞ、いとあさましく、かへすがへす、とりかへばやと思されける」「こはいかがすべきと、世とともに嘆かしきより

ほかのことなかりけり」とする『とりかへばや物語』の父左大臣の心情は、傍線部からも明らかのように、『紫式部日記』と類似しているのである。

それでは、物語全体における、女主人公の才学はどのような形で描かれているのか。この点については、作中にあらわれる語彙「才」をキーワードとして分析したい。『とりかへばや物語』における「才」の用例を検証すると、十四例ある中、父左大臣に一例、吉野の宮に三例、唐土に一例、宇治の若君に一例以外、女主人公に八例使われていることが判明する。

さらに全用例を分析すると、女主人公の立身出世は彼女の「才」とは不可分な関係であることがわかった。優れた「才」の持ち主として成長した様子は、「これはいといみじく、今よりはかばかしく、才かしくて、公の御後見に生ひ出でたまふ。琴笛の音も、天地を響かしたまへるさまいとめづらかなり。読経うちし、歌うたひ、詩など誦じたまへる声、はた、まことに斧の柄も朽ちぬべく、ふるさと忘れぬべし。何事もさらに飽かぬことなき御有様」(一七四頁)と父左大臣の目によって確かめられる。「かかる御才、容貌すぐれたまへること、やうやう世にきこえて、内、春宮にも、さばかり何事にもすぐれたなるを今まで殿上などもせさせず交じろはせぬことと、つきせずゆかしがらせたまひて、大将殿にもたびたび御気色あれど」(一七五頁)とそれはようやく世に聞こえて、帝と東宮から出仕するように催促される。また、妊娠した身を抱え、宇治への隠棲を控える女主人公は、三月の観桜の宴に今まで披露していなかった笛の曲を演奏する。その優れた才能に感心して、「さまざま興つくれたる才、有様はすべてこの世のものならず、あまりかかる栄えや長からざらんとゆゆしきに」(三〇四頁)と帝は忌々しく感じながらも、女主人公を昇進させる。その昇進に伴い、女主人公と隠棲の約束をしている

宰相中将も昇進するが、彼は自分の昇進を喜ばず、ただ「いみじかりける容貌、才のほどかな、かかる身をもて埋もらさんことも、我になりて思ふに、難しかしと、夜もすがら思ひ明かして」(三〇五頁)と女主人公が意を変えることを心配し、眠れぬ夜を過ごす。

さらに、登場するときから、「よろづのことすぐれておくれたることなく、世の人のしとすること、方々の才、陰陽、天文、夢解き、相人などいふことまで、道きはめたる才どもなりける」(二二七頁)と優れた「才」の持ち主として描かれ、唐土の人に「日本人あまた渡り来ぬ、わが国にもかしこき人多かれど、道々の才かばかりかしこき人なかりき」と感心して賞賛される吉野の宮は、たびたび女主人公の「才」を感心するのである。四の君と宰相中将との密通事件で世を厭う女主人公は、吉野の宮のことを聞き、「世に絶えたる琴習ひたてまつり、まだ見及ばぬ文のところどころ聞きあらはさん」と琴と漢籍の学習を理由として、宮に面会したいと切に望んでいる。それを受け、面会を快諾した吉野の宮は、女主人公と話をしていく中、「才のほどなどこの世にあまりて、事ごとにくれたりける人かな」(二三七頁)と感心するのである。その後、吉野の宮は、女主人公の漢学の才能をめで、唐土の本を見せると、「この中納言の御才、悟りの妙なること、唐土にも並ぶ人なしと思ひたりし我にも劣るまじかりけり、めづらかなる人かな、と思し驚かる」(二四〇頁)のである。さらに漢文を作らせてみたところ、その完成度は唐土より優れたものであると賛嘆を禁じえないものとなったのである。このように、きょうだいの交換に重要な役を果たしている吉野の宮と女主人公との関係は、女主人公の「才」を基盤として構築されているのである。

つぎに、才学の交流と伝授の面が、物語の進行に果たす役割を考察する。強引に宰相中将と契りを交わした翌日の女主人公は、父左大臣に昨夜自分が左大臣邸にいる口実として、「宰相の中將の、文のこと問ふべき

ことありてわざとまうで来たりつれば」(二七七頁)と申し上げている。父左大臣はそれを納得したが、そこから、二点のことがうかがえるだろう。女主人公の才学が宰相中将より優れていることと、普段から両者にはこのような才学の交流があったことである。このような交流は、きょうだいの交換後の男主人公にも継承されていく。

吉野に隠棲し、きょうだい二人が入れ替わる準備のため、男主人公は「かばかりにて居たまひて、女しく過ぐしたまへるに、文をも習ひなどしたまふ」(三五八頁)、「吉野には、この男君すするなるやうなれば学問などして」(三六九頁)吉野の宮のもとで漢学を勉強し始めている。きょうだいたちの交換が叶い、男主人公は吉野の中君を宰相中将に嫁がせ、二人が仲直りした後、宰相中将は「大將の御方へもさるべき折は渡りたまひつつ、琴笛の音も文の道のこと、同じ心に聞こえ合はせつものしたまふ」(四九七頁)と、今までのように才学をなかだちとする親交を再開するのである。

才学の交流は人間関係の「回復」をもたらすだけでなく、「家」の継承をも象徴するものとなる。二条の邸に、男主人公もかつての父左大臣と同じく、「さるべき殿上人、上達目など文作り、雅樂の頭などして昼より遊び暮らしたまひて」(四八九頁)と男性貴族を召し、詩文管弦の会を主催するのである。これは帝の子を身ごもった女主人公が父左大臣の邸ではなく、男主人公が新築した二条邸で出産することと同じく、左大臣家の権力が次の世代へ、つまり男主人公の世代へ移行していることが読み取れる⁶⁾。

以上、女主人公の人物造形の重要な要素である「才」が物語の進展に果たす役割について考察を進めてきたが、次は、文学史的な立場から、同時代の文学作品との比較を通して、『とりかへばや物語』の女主人公の特質について検討する。

三、同時代文学史の視点から見る「才」と女性

先行する物語で、女性と才学との関連、特に漢才との関連を明確に描くものは稀である。『源氏物語』の雨夜の品定めにおける式部丞の語りのなかで、「公事をも言ひあはせ、私さまの世に住まふべき心おきてを思ひめぐらさむ方もいたり深く、才の際、なまなまの博士恥づかしく、すべて口あかすべくなむはべらざりし」（『源氏物語』二、八五頁）というような才学の非凡な博士の娘が登場しているが、それは才学のある人はすべてを見せるのではなく、「すべて、心に知れらむことをも知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは過ぐすべくなむあべかりける」（『源氏物語』二、九〇頁）と左の馬の頭の発言を導くだけのものとなっている。

日本と唐土を行き渡る『浜松中納言物語』の主人公である中納言は、帝に唐土の女性の才学の優れている様子を奏上している。なかでも、特に一の大臣の五女は、「真名、仮名人にすぐれて、文の道暗からず、言葉ぎき心深うなむ作りはべりしありさま、なみなみの博士も及ぶべくもはべらざりき」（『浜松中納言物語』二六五頁）、「書き、文作り、まことしき才の、いとみじうすぐれて、出で立ちしほどに」（『浜松中納言物語』二六九頁）と言われている。しかしながら、これらの描写は唐土の女性に限定されており、日本の女性には決して用いられない。このように、先行する物語では決して主役として登場しえない漢才の素養を持つ女性を、『とりかへばや物語』では主人公として描いているのである。

しかしこの発想は、決して単なる偶然の結果ではあるまい。当時の女性教育の歴史的な背景について、梅村恵子は記録や歴史物語を資料としながら、「女性に対する教育は家庭環境によって大きな差があり」、「平仮名による表現法の発達によって新しい文学も生み出された。このために、

女性にとって漢詩文教育は絶対的なものとはならず、儒教的家族観を身につけた男性の中に女性の知的教育に消極的になる者もあった。しかし、学者官人の家では家業の継承者たる男子の傍らで女子にも漢学の知識を教える機会も多かった。上流貴族であつてもそこに政治的要因も加わって、むしろ積極的に奨励されることすらあつた。」と指摘している。⁷⁾ここでは、特に『とりかへばや物語』と同じ院政期に成立した歴史物語である『大鏡』を比較してみたい。

『大鏡』には、才学の高い女性として、高内侍と道隆の三女の話が取り上げられている。とくに道隆の三女は、帥宮と結婚したが、客への応対が異常であるため夫婦の仲が絶えたという噂がある。その具体的な様子は、「客人などのまゐりたる折は、御簾をいと高やかに押しやりて、御懷をひろげて」（『大鏡』二五七頁）立っただけでなく、以下の引用が示すように、文章生を召して作文の会を開くときに、屏風より金を賜り、高い声で文章を品定めすることである。これは明らかに女性による男性貴族に限定された場への一種の「侵入」となっている。

【引用三】『大鏡』

また、学生ども召し集めて、作文し遊ばせたまけるに、（道隆の三女は）金を二三十両ばかり、屏風の上より投げ出して、人々うちたまければ、ふさはしからず憎しとは思はれけれど、その座にては饗応し申してとり争ひけり。「金たまはりたるはよけれども、さも見ぐるしかりしものかな」とこそ今に申さるなれ。人々文作りて講じなごするに、（道隆の三女は）よしあし、いと高やかに定めたまふ折もありけり。二位の新発の御流にて、この御族は、女も皆、才のおはしたるなり。

男性貴族の詩文の会に「侵入」する女性として、道隆の三女と『とりかへばや物語』の女主人公との間には明らかな共通点が見出せる。作品成立の前後関係の確定は難しいものの、相互に密接な関連が想定されるのである。あるいは『とりかへばや物語』が『大鏡』に依拠した可能性も皆無とは言えない。

このような漢学の素養のある女性の造形は、同じく「異性装」を題材とする『在明の別』にも継承されている。『とりかへばや物語』のように、「才」が人間関係の回復や「家」の継承の記号としては用いられていないが、『在明の別』の女主人公は、優れた「才」の持ち主として描かれている。また、やや後の成立である『我が身にたどる姫君』の女帝にもそのような造形がうかがえる。以下の引用五のIは、女帝に詔書の脱字を指摘され、民部卿は女帝の賢明さに感心して、その手跡を女帝の父である嵯峨の院から継承したものと認識し、「明王」に逢うことで感動して涙を流す場面である。引用五のIIでは、女帝の夫である三条院の口を借りて、傍線部が示しているように、彼女には「才」があり、父と夫について積極的に学習し、三代集、物語、『和漢朗詠集』以外、『文選』『群書治要』など諸々の漢籍をも読破することが語られるのである。

【引用四】 『我が身にたどる姫君』

I ことごとしきことにや、朝かれひに参るべきよし仰せらるれば、持て参る。端の御簾に几帳添へられて、中納言の典侍さぶらひ給ふ。参らせたれば、御覧するほどもなく、返し給はずとて、「典侍、文字は落ちぬにや」と、ほのかにのたまへば、少納言賜りて開き見て、

汗あゆる心地して、出でてこのよし仰す。民部卿、いまさらに見て、「老い呆け侍りにけるあまりに、まさに、見たる文なれば何ごとかは、と思ひたゆみて、目のただとどしき、詳しく見侍らざりけり」とかしこまりおそれ申して、重ねて参らせたれば、書かせ給ふべき文字書き付けて下させ給へるを、ただ一文字なれど、嵯峨の院の御手は優れておはしますに、たがふところなきものから、いまずしめづらしくうつくしう見ゆるを、涙ほろほろと落とし給ふ。「おろかなる翁の失錯仕うまつらざらましかば、我が君の聖明はあらはれおはしまさざらまし。六代聖代に仕うまつりて、いみじき明王にも逢ひ奉れるかな」としほれ給ふ。聞く人涙落とさぬなし。

(二〇〇頁～二〇一頁)

II 頭中将は、院に親しく仕うまつる人なれば、夕つ方参りて、御物語などあるついで、民部卿の朝臣の思へりつるけしき、申しつることなど奏しけり。御けしきいとよくて、「かの朝臣、こればかり御覧じ知りたるとや思ふらむ。いみじくつつみ給ふこと、後ぎたなけれど、世の常の貴女など思ひ奉るにや。いと不思議にめづらしき人の御さまなり。本は手に持ちて、式部大夫の朝臣に形のごとく受けたる、数ばかりや。いささかの「負ひ籠の効」といふべからむ。ものを読み、さやうのふしぶし疾く見分かむ方、さらに及び聞こゆまじうなむある。いひたてば、けうとう心劣りしぬべけれども、人の推しはからむやうに、はかばかしげにうたてあるさまにはあらで、ただ一度見つるものを、長く忘れぬ人におはすれば、いづれの人か及ぶべき。内住みしはじめ給ひし時は、三代集、物語など、世にあるほどのほみな覚え給へるにやと心得しに、ほどへて後、朗詠を、院教へ奉らせ給へりけるならひに、偏継ぐとて、文選のありしを、

少しゆかしげに思したりしかば、四五巻読み聞かせ奉りたりし後、残りも点したりし書を置きたりしを、ひとり見給ひて。わづかに所々しるし付きたりし、少々聞こえてし後は、みな覚えたるにやとぞ覚えし。書はやがて返されにしかば、これになむある。せちに言葉もなき人にて、言続けてものたまふ時もなかれど、この方は、げに变化の人にやとぞ見え給ふ。世の常の后などいひておはすべくもなしかば、見る所ありてなむかくめづらしきことを思ひ立ちにし。譲り聞こえし時、故院のたまはせたりし群書治要といふ書をぞ、昔の御諫め背きて、我れはうるさくて見ることもせざりしを奉りしも、去年ぞ返し給へる。人の見奉る時は、書など見給ふこともなかりき。前の世のことなるべし」などのたまはするに、

(一〇五頁～一〇六頁)

このように、『我が身にたどる姫君』は、賢明な「女帝」を造形するとき、その善政の様子を長々と具体的に述べ立てているだけでなく、「才」も一つの重要なコードとして、用いているのである。これは『とりかへばや物語』からの影響と言えるだろう。

おわりに

以上、「異性装」の原点に立ち戻り、ジェンダーを構成する要素を分析し、『とりかへばや物語』における女主人公の人物造形を再解釈した。あわせて文学史の見地から、『とりかへばや物語』の影響を受けたと思われる物語、『新蔵人物語』・『在明の別』・『我が身にたどる姫君』との関係について順に検討した。

男性のジェンダーを表現するものと自明視されて、今まで検討されな

『とりかへばや物語』の「異性装」

かった物語冒頭に描かれている女主人公の身体動作および「才」との関連に注目し、それを分析した結果、女主人公の異性装を引き起こす要因となる「走る」身体動作は、『源氏物語』や『虫めづる姫君』などから撰取したものであることがわかった。それを「男性的ジェンダー」として定着させるのは『とりかへばや物語』であると考えられる。また、『とりかへばや物語』以前、才学のある女性は主役として登場することはないが、『とりかへばや物語』は、同時代の『紫式部日記』『大鏡』と連動しつつ、才学を思う存分發揮する女主人公を造形した。その影響を受けて、後の物語である『在明の別』・『我が身にたどる姫君』にはそのような女主人公像の踏襲が見られるのである。このように、「異性装」という新しい題材を使い、「才」の素養を賦与された男装の女主人公を造形し、さらに物語の進行に重要なコードの一つとして生かすことで、『とりかへばや物語』は今までにはない、新しい〈女の物語〉の確立を試みていると言えるのである。

女主人公と比較して、男主人公のジェンダーに関する描写はどのように読むべきか。さらに、同時代の中国の「異性装」を題材とする物語と照合することで、『とりかへばや物語』の日中比較文学史における位置づけを解明することができるだろう。今後の課題として、さらに考察していきたいと考えている。

注

- ① ジュディス・パトラは『ジェンダートラブルフェミニズムとアイデンティティの攪乱』（竹村和子訳、青土社 一九九九年）において、以下のように指摘している。

ある「男」が男性的な属性をもっており、その男性的な属性がたまたま、うまい工合にその男の性質であると考えらるなら、べつの「男」

が女の属性（それがどんなものにせよ）をもっていて、しかもそのジェンダーは揺がないということも言える。けれども「男」や「女」を不動な実体として何よりも優先することをやめてしまえば、不調和を奏でているジェンダーのさまざまな性質を、基本的には無傷であるとはみなしているジェンダー存在の低位において、それから派生したものとかが、偶然のものともみならずことは、もはや不可能である。不動の実体という考え方そのものが、首尾一貫したジェンダーの序列のなかにさまざまな属性を強制的に秩序づけることで生みだされる架空の構築物だとするならば、実体としてのジェンダー——名詞としての男と女の存在の可能性——に疑義がつきつけられるのは、連続的または因果的な理解可能性のモデルに合致しない不調和な属性の戯れによってである。

したがって、不動の実体とか、ジェンダー化された自己という見せかけ——すなわち心理学者のロバート・ストローラーが「ジェンダーの核」と言ったもの——は、さまざまな属性を、文化的に確立された首尾一貫性のラインによって規制することで生産されているものにならざるを得ない。ということはこのジェンダー生産の虚構性をあばくためには、まず最初に名詞があつて、次にそれに従属する形容詞があるという既成の枠組みへの同化を拒む、規制されていない属性の戯れが必要になる。もちろんこの不調和な形容詞が遡及的に作用して、それが修飾していると思われる実体的なアイデンティティを定義しなおし、その結果、実体的なジェンダー・カテゴリーの枠を広げて、まえには排除されていた可能性までも含みこむことになるかもしれない。だがそもそも実体というのは、その属性を規制することで偶発的に作りだされる首尾一貫性でしかないもので、実体の存在論は、人為的な結果というだけでなく、本質的な余剰なのである。

この意味で、ジェンダーは名詞ではないが、自由に浮遊する一組の属性というでもない。なぜなら、ジェンダーの実体的効果は、ジェンダーの首尾一貫性を求める規制的な実践によってパフォーミング・テイヴに生みだされ、強要されるものであるからだ。しかがってこれまで受け継がれてきた実体の形而上学の言説のなかでは、ジェンダー

は結局、パフォーミング・テイヴなものである。つまり、そういう風に語られたアイデンティティを構築していくものである。この意味でジェンダーはつねに「おこなうこと」であるが、しかしその行為は、行為のまえに存在すると考えられる主体によっておこなわれるものではない。ジェンダー・カテゴリーを実体の形而上学の外側において考察しなおそうとするなら、『道徳の系譜』におけるニーチェの主張——「おこなうこと、もたらずこと、なることの背後に『あること』はない。『行為者』は行為に付けられた虚構でしかない——行為がすべてである」——が正しいことを、ここで考慮すべきであろう。この主張を、おそらくニーチェは予想もせず、認めもしなかったように応用して、命題として次のことが言えるかもしれない。ジェンダーの表出の背後にジェンダー・アイデンティティは存在しない。アイデンティティは、その結果だと考えられる「表出」によって、まさにパフォーミング・テイヴに構築されるものである。

（五七頁～五九頁）

- ② 小学館新編日本古典文学全集『とりかへばや物語』（石埜敬子校注・訳 二〇〇二年）一六九頁～一七〇頁
- ③ 稲田利徳「人が走るとき——王朝文学と中世文学の一面——」『人が走るとき——古典のなかの日本人と言葉』笠間書院 二〇一〇年
- ④ 岩田行展「走る」『王朝物語のしぐさ』ことば 糸井通浩、神尾暢子編 清文堂 二〇〇八年
- ⑤ 原岡文字「第三章 紫の上の物語 紫の上の登場」『源氏物語』に仕掛られた謎「若紫」からのメッセージ』角川学芸出版 二〇〇八年
- ⑥ 物語の結末に、女主人公の子である宇治の若君は、「人よりことなる御様、容貌、オのほど」（五二二頁）と、女主人公の「オ」を継承する人物として造形されている。これは統編の存在や物語の長編化への期待を感じさせるものとして読める。
- ⑦ 梅村恵子「平安貴族の家庭教育——文会と歌合との関わりで——」『歴史評論』五一七号 一九九三年五月
- ⑧ 『とりかへばや物語』は、『源氏物語』から始まる、「焦点を女の方にし

ぼって、その人生の変転を辿った」〈女の物語〉であると指摘され、『源氏物語』から『夜の寝覚』へと連なる王朝物語史上の転換点に位置する重要な作品であると評価されている。星山健「王朝物語史上における『今とるかへばや』―「心強き」女君の系譜、そして〈女の物語〉の終焉―」（『王朝物語史論』引用の「源氏物語」二〇〇八年 笠間書院）を参照。

※本稿における『源氏物語』（阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳 一九九八年）・『紫式部日記』（中野幸一校注・訳 一九九四年）・『浜松中納言物語』（池田利夫校注・訳 二〇〇一年）・『とるかへば

や物語』（石埜敬子校注・訳 二〇〇二年）・『大鏡』（橘健二・加藤静子校注・訳 一九九六年）の本文引用は小学館の新編日本古典文学全集による。『新蔵人物語』は『室町時代の少女革命』、『新蔵人』絵巻の世界』（江口啓子・鹿谷祐子・玉田沙織編 笠間書院 二〇一四年）により、『我が身にたどる姫君』は笠間書院の中世王朝物語全集『我が身にたどる姫君 下』（片岡利博校訂・訳注 二〇一〇年）による。なお、傍線と括弧内の内容は筆者によるものであり、頁数は括弧内に示す。

（しょう・しょうじゅん／本学大学院博士後期課程）